

私の一冊

一般教育等 中山徹 先生

柄谷行人著 『隠喩としての建築』(定本柄谷行人集 2)

小鹿図書館 : 918.68/Ka 63/2 (岩波書店)

講義で『サウンド・オブ・ミュージック』を見たことあるひと?」ときくと、ほぼ半数の学生が手をあげる。つづけて「奇妙な映画ですよ」というと、ほぼ全員が怪訝な顔をする。そこでわたしはこんな話をするようになる。たとえば、トラップ家を出て修道院に戻ってきたマリアに向かって、修道院長が「すべての山に登れ」(つまり、トラップ大佐のことが好きなら、その気持ちに正直に生きなさい!)と高らかに歌い上げる場面。われわれは、これを見て当惑しないだろうか。なにしろここでは、禁欲と自制を説いているとおもわれた人物が、自分の欲望に忠実に行動せよと主張するのだから。われわれは、互いに矛盾しあう二つのメッセージのあいだで身動きがとれなくなってしまう。あるいは、大佐の長女リーズルと電報配達人ロルフの逢引の場面。「ぼくは17才、もうすぐ18才、きみの面倒をみてあげる」と申し出るロルフに、リーズルは「わたしは16才、もうすぐ17才、だからあなたが頼りよ」と応じる。しかし、この場面もよく見るとおかしい。リーズルは「わたしって無垢なの」、「男のひとのことなんて何にも知らない」と歌うが、そのときの彼女は、男の扱い方を心得た女以外の何者でもない。彼女は肩をくねらせ、流し目を送り、ロルフの腕に指を這わせ、彼の頭を撫でまわす……。矛盾しあう言葉と身振り。彼女は、知っていることとは別のことをやっている。また「無垢」という言葉にも注目してみるとおもしろい。ひとはよく「子供は無垢だ」という。しかし、子供は「自分は無垢だ」とはおもわないだろう。「子供は無垢だ」といえるのは、もはや無垢ではなくなった、無垢でないことが何を意味するか分かっている「大人」だけである。「無垢」とは、読んで字のごとく「けがれ(垢)の無い」ことを意味する。つまり「無垢」の意味は、はじめから「非-無垢=けがれ」を前提にしなければ成立しない。その意味で「無垢」という言葉は、それ自体無垢ではありえない。(「無垢」を意味する英語 innocentでも、まったく同じことがいえる。)そうであれば、われわれはリーズルに向かってこういつてみたい誘惑にかられる。「わたしは無垢である、そういえるあなたは無垢ではない」。

この話を講義でするたび、わたしは、学生諸君と同じ年頃に熱中して読んだ柄谷行人の『隠喩としての建築』を思い出す。わたしがこの本を通じてはじめて知った概念のひとつに、グレゴリー・ペイトソンのいう「ダブル・バインド」(二重拘束)がある。それは分裂病的症候の形式的特徴を示す言葉であるが、その内容は、われわれが『サウンド・オブ・ミュージック』で出会った奇妙な事態と基本的に同じなのである。「一般的にいえば、ダブル・バインドは、コミュニケーション

ンにおいて、相手が二つの異なるレベル(タイプ)のメッセージを表明し、且つそれらが互いに否定しあっているときにおこる。ダブル・バインドは、したがって、自己言及的なシステムにおいて生じるといってよい。」(『隠喩としての建築』)

「自己言及的なシステム」とは、なんだろうか。わたし自身の例を使って簡単に説明すれば以下ようになる。いま仮に、語そのものと意味が一致する語、いいかえれば、自分自身を記述している語を「自己同一語」と呼び、語そのものと意味が一致しない語、いいかえれば、自分自身を記述していない語を「自己差異語」と呼ぶことにする。たとえば、「日本語」という語は、自己同一語である。なぜなら、その語自体、日本語であるから。それにたいして「英語」という語は、自己差異語である。なぜなら、その語自体は日本語であるから。「ひらがな」は、その語自体平仮名であるから自己同一語。「平仮名」は、その語自体漢字であるから自己差異語である。「無垢」は、先にみたようにその語自体無垢ではないので自己差異語といえるだろう。このように言葉を言葉についての言葉にする回路が、いわば言葉の「自己言及的なシステム」である。これはパラドクスをうむ。なぜなら、ここでは、「英語」は英語ではない、「平仮名」は平仮名ではない、「無垢」は無垢ではない、といえるからである。

さらに「自己言及的なシステム」は、「自己差異的なシステム」につながっている。こう問うてみよう。「自己差異語」という語は、自己同一語なのか、自己差異語なのか。もしその語が自己同一語であるとする、それは自己差異語になる。また、もしその語が自己差異語であるとする、それは自己同一語になる。つまり、「自己差異語」は、自分自身でないことによって自分自身になり、自分自身であることによって自分自身でなくなる。これは、「自分自身を要素として含まない集合の集合は、自分自身を要素として含まない集合の集合に含まれるか」という問いが生み出す有名な集合論のパラドクスと同型のパラドクスである。

柄谷氏は、『隠喩としての建築』や同時期の『内省と遊行』において、こうした「自己言及的な形式体系」とそのパラドクスを、哲学(たとえばハイデガーの存在論)、文学理論(たとえばポール・ド・マンのデコンストラクション批評)、言語学(たとえばソシュールの言語学)、数学(たとえばゲーデルの不完全性定理)、経済学(たとえばマルクスの価値形態論)などに通底する問題として論じている。人間が、「言語、数、貨幣」という、人間を人間たらしめているもっとも本質的な領域において「自己言及＝自己差異」のパラドクスを生きざるをえないこと。氏の著作を通じてこの人間の条件を知ることが、十九、二十歳のわたしにとって、とてもスリリングな体験であった。

それから数年歳を重ねたわたしは、恋愛もまた、過剰で過酷な、しかし同時に笑いのみなもとでもあるこの人間の条件が生きられる領域であるかもしれない、とおもうようになった。ただし悲しいことに、それは実体験からではなく、ある書物から学んだことなのだが。最後に、その書物からすてきな一節を。「恋するわたしは狂っている、そういえるわたしは狂っていない。」(ロン・バルト『恋愛のディスクール・断章』)